

目次

憑りつかれた老婦人

5

訳者あとがき
313

憑りつかれた老婦人

主要登場人物

ヒルダ・アダムス	看護婦。別名、ミス・ピンカートン
パットン警視	警視
イライザ・フェアバンクス	裕福な老婦人
カールトン	イライザの長男
スージー	カールトンの妻
マリアン	イライザの長女
ジャニス	マリアンの娘
フランク・ガリソン	マリアンの元夫
アイリーン	フランクの現在の妻
コートニー・ブルック	医師
ウイリアム	執事
マギー	料理人
アイダ	メイド
エイモス	運転手

第一章

ヒルダ・アダムスは、一つの事件の解決後にはお決まりとなっていることをやっていた。入浴剤をたっぷり入れた風呂にゆつたりと浸かり、かすかに白髪が混じった短い髪を洗って、足をしげしげと調べて爪を切ると、小さいが有能な両手にローションを入念にすりこむ。

ナイトガウン姿で座っている彼女は三十八歳という年齢でも、天使さながらに見えた。肌は薔薇色で目が澄んでいて、子どものようだ。その日、パットン警視が新任の警察本部長に話したように、幼い感じがするところがヒルダの売りだった。

「彼女はコウノトリが赤ん坊を運んでくると、いまだに思っているような雰囲気なんです」パットン警視は言った。「訓練を受けた看護婦として十五年間も働いている女には珍しい。しかし、たいいてい人間が顕微鏡を使って見るよりも多くのものが、あのブルーの目で見えるんです。さらに、彼女は人から信用される。おしゃべりなタイプじゃないから、秘密を話しても安全だと思われます。彼女は椅子に座って編み物をし、飼っているカナリアの話を聞かせる。するとほどなくして、相手は知っていることを洗いざらい打ち明けるってわけ。あれは天賦の才ですよ」

「なかなか役立つんだらうな？」

「役立ちますとも。問題が起こったとき、上流家庭の人間が真っ先に思い浮かべるのは何か？ 訓練

を受けた看護婦です。誰かが病気になる、ほら、彼女がいてくれるというわけですよ」

「上流家庭ではその種の問題など起きない気がするが」

パットン警視は保護者ぶった笑みを浮かべて新任の本部長を見た。「きつと驚くでしょうな」彼は言った。「奴らは金を持っている。そして金は厄介事を引き起こす。それだけではありません。頭がおかしい人間も出てきます」

パットン警視はにやりと笑った。本部長はいぶかしげに彼を見つめた。

「実はですね」警視は言った。「今日の午後、寝室に蝙蝠こつもりが出て困るという老婦人からの報告がありました。あらゆる場所をふさいでも、相変わらず蝙蝠が現れる。鼠が出ることもあるし、雀も一、二羽出てくるというんです」

本部長は眉を上げた。「パンダは出ないのかね？」そう尋ねた。「象は？」

「そんなものまで出ないそうですが、奇妙な音も聞こえるというんです」

「何かに憑りつかれているらしいな」本部長は言った。「年老いた女はときどきおかしくなるんだ。家内の母親は亡くなった夫を見たかと思ひ込んでいたことがよくあった。少しも好意を持っていなかった相手だったのに。よく夫に物を投げつけていたな」

パットン警視は礼儀正しく微笑んでみせた。「年寄りにはそんなことがあるかもしれませぬ。さっきの老婦人には一緒に暮らしている孫娘がいます。孫娘によると、老婦人の話は本当らしいです。たぶん孫娘に言われて、ばあさんは通報してきたんでしょう」

「で、どうしろというんだね？」

「孫娘は夜だけ警官に見張りに来てほしいと言いました。フェアバンクスという家ですよ。おそらく

ご存じでしょう。孫娘は誰かが夜に侵入して、いろいろな動物を持ち込むと思つていろいろです。だが、老婦人はそんな考えはばかっていると仰いました。問題は家そのものにあるのだと」

本部長は驚いたようだった。「まさかイライザ・フェアバンクスじゃあるまいな？」

「まだファーストネームは知りませんが。ミセス・フェアバンクスと聞いています。ヘンリー・フェアバンクスの未亡人だとか。心当たりでもあるんですか」

「なんてことだ」本部長は弱々しく言った。「それで？ きみは彼女に何と言つたのかね？」

パットン警視は立ち上がり、ズボンに包まれた脚を揺すつた。「信頼できるよい話し相手コンパニオンを雇うように勧めました。老婦人の身を守るだけでなく、落ち着かせてもくれる女性を」微笑する。「できれば、訓練を受けた看護婦がいいとね。かかりつけの医者ドクターに相談してみると老婦人は言っていました。その医者からの連絡を待つているところです」

「で、アダムスとかいう看護婦を送り込むのか？」

「予定があいていれば、ミス・アダムスを派遣するつもりです」パットン警視は「ミス」という部分をやや強調して言った。「もし、家が何かに憑りつかれているとか、町の動物園全体がフェアバンクス家に引越してきたとかヒルダ・アダムスが言えば、わたしは信じますよ」

パットン警視はにやりと笑いながら部屋から出ていった。本部長は大きな机の後ろの椅子の背にもたれ、ぶつぶつ不平を言った。耄碌もろくした老婦人の問題に頭を悩まさなくても、やるべきことはいくらでもあるのだ。たとえその老婦人がイライザ・フェアバンクスでも。それとも、「耄碌した」ではなく、「老いぼれた」と言つたほうがいいのか？ 彼にはよくわからなかった。

その晩八時になって、ようやくパットン警視のもとに連絡があった。電話をかけてきたのは医師ではなかった。老婦人の孫娘だったのだ。

「パットン警視さんですか？」彼女は言った。

「そうですか」

相手は少々息が切れたような声をしていた。「祖母の代わりに電話しております。また蝙蝠を捕まえたことを、あなたにお知らせしてほしいというのです」

「本当なのですか？」

「本当って、何がですか？」

「また蝙蝠を捕まえたことですよ」

「ええ。タオルで捕まえて手元にあるとか。わたしは電話をしようと抜け出してきました。祖母は使用人もわたしたちのこともまったく信用していません。警察に誰かをよこしてもらいたがっています。今日、看護婦のことをおっしゃったそうですね。今夜、祖母には誰かがついていべきだと思いません。かなり神経が高ぶっていますから」

パットン警視は考えをめぐらせた。「医者はどう言っていますか？」

「お医者さまには話しました。あなたにすぐ電話をかけるとのことですよ。ブルック先生といます。コートニー・ブルック先生です」

「わかりました」警視は言って電話を切った。

そんなわけで、その晩、ヒルダ・アダムスが手にローションをすりこんで、カナリアの籠に覆いを掛け、きれいに整えたベッドにもぐり込もうとしたときに電話が鳴ったのだった。

彼女は嫌悪を込めて電話を見やった。一つの事件から別の事件に移る間の休暇が気に入っていた。制服や制帽を点検したり、ストッキングの穴をかがったり——もつとも、この頃のストッキングは繕えないほどの穴になるのだが——映画を一、二本見たりする休みが。つかの間、電話が鳴るままにしておきたい気持ちに駆られた。だが受話器を取った。

「もしもし」

「パットンだが。ミス・ピンカートンだね？」

「ヒルダ・アダムスです」ヒルダは冷ややかに言った。「そんなくだらない名前と呼ぶのはやめて」

「寝ていたのかい？」

「ええ」

「そうか、すまないな。また、きみに事件なんだ」

「今夜はだめです」ヒルダは有無を言わさぬ口調だった。

「これには興味を引かれると思うんだがな、ヒルダ。ある老婦人が自分の部屋で蝙蝠を捕まえたんだそう。タオルで」

「本当に？ 髪に蝙蝠がもぐり込んだのではなくて？ 捕虫網で採ったのではないのね？」

「わたしがタオルと言ったら、タオルなんだ」警視は断固とした口ぶりで言った。「彼女のところにさまざまな生き物が迷い込んでくるらしい。小鳥だの蝙蝠だの、鼠だのがね」

「わたしは心の病は扱わないの。ご存じでしょう、警視さん。それに、任務を終えたばかりなのよ」

パットン警視はいらだった。「なあ、ヒルダ」彼は言った。「こいつは何かあるかもしれないし、何でもないかもしれない。だが、わたしにはひどく妙な事件に思える。老婦人と一緒に暮らす孫娘が本

当の話だと言っているんだ。もうすぐ孫娘からきみに電話があるだろう。この件を引き受けてもらいたいんだ。頼む」

ヒルダはやりきれない気持ちで、覆いの掛かった鳥籠や柔らかなベッドを見やり、開け放したドアの向こうのささやかな居間にある、インド更紗のカバーを掛けた椅子や、優しい感じの青いカーテン、読んでいない雑誌の山に目をやった。まだかすかに湿っている髪の毛さえも意識した。

「この時期は蝙蝠が多いのよ」彼女は言った。「老婦人が一匹捕まえたって、かまわないでしょう?」
「蝙蝠が入ってくる方法などないから問題なんだ」警視は言った。「頼むよ、ヒルダ。そのブルーの目をよく光らせていてほしい」

ヒルダはとうとう引き受けたが、いかにも不承不承だった。数分後、悩みを抱えたらしい若い女の声で電話がかかってきたとき、ヒルダは早くもスーツケースを詰めていた。女は明らかにパットン警視の指示に従って電話してきたらしかった。

「お医者さまのブルック先生の代わりにお電話しています」彼女は言った。「わたしの祖母の具合がよくないので。こんな遅くにお電話して申し訳ないのですが、今夜は祖母を一人にしておくべきではないと思いますの。こちらにいらしていただけますか?」
「パットン警視から電話で話をうかがった方でしょうか?」

女の声はぎこちなかった。「ええ」と言った。

「わかりました。一時間後にはそちらへうかがいます。もっと早いかもしれません」

ヒルダは安堵のため息が聞こえたように思った。

「よかったわ。祖母はミセス・ヘンリー・フェアバンクスです。住所はグローブ街の十番地。お待ち

しています」

ヒルダは受話器を置いてベッドの端に深く座った。名前を聞いて仰天していた。とすると何年もの間、ロンドンの社交界を仕切ってきたあと、年老いたイライザ・フェアバンクスはタオルで蝙蝠を捕まえるようになったのか。ヒルダが子どもだった頃、イライザは「レディ・フェアバンクス」と呼ばれていた。当時のフェアバンクス家の前庭の芝生にはまだ鉄製の鹿が飾ってあり、大衆を寄せつけまいとしてそのまわりを鉄柵で囲ってあった。今では鹿も取り去られ、主人のヘンリーも世を去った。近隣の光景も変わってしまった。殺風景な下宿屋が建ち並び、反対側の通りの角には近所向けのスーパーマーケットができた。しかし、フェアバンクス家の広大な四角い建物は柵に囲まれたまま、以前のように建っている。変わりゆく周辺や世間に反抗するかのよう。

ヒルダは立ち上がって着替え始めた。思い出に敬意を表し、いちばんいい服と帽子を身に着けた。それから片手にカナリアの籠を、もう一方の手にスーツケースを持って階段を下りた。大家の部屋のドアのところで籠の覆いを外した。カナリアのディックは興奮していた。枝から枝へ飛び移っていたが、ヒルダを目にするとおとなしくなり、ビーズのような瞳で鋭く彼女を見つめた。

「いい子にしているのよ、ディッキ―」ヒルダは言った。「それから毎日、ちゃんと水浴びしてね」

カナリアはさえずり、ヒルダはまた籠に覆いを掛けた。さまざま人間と人生を分かち合っているものの、ディッキ―の世話も含めて自分自身の人生をあまり生きていないと思うとなんだかわびしかった。いつものように行き先を書いた紙切れと一緒に大家に籠を預けた。それから静かに家を出ると、角のところにタクシー乗り場に歩いていった。しばしばヒルダを乗せていくビル・スミスが帽子のひさしに手をやり、スーツケースを持ってくれた。

「さっきお帰りになったばかりだと思いましたがね」彼はさりげなく言った。

「わたしもそう思っていたのよね、ジム。グローブ街の十番地へお願い」

彼はすばやくヒルダを見やった。「フェアバンクス家でどなたかご病気なんですか？」

「年離れたミセス・フェアバンクスの具合がよくないのよ」

ジムは声をあげて笑った。「また蝙蝠を見たってことですかい？」

「蝙蝠？ どこでそんなことを聞いたの？」

「ちよつとした噂でね」ジムは快活な口調で言った。

ヒルダは座席の端の前のほうに座った。ナイトガウンを脱いで短い髪に帽子をかぶった彼女はもはや三十八歳の天使には見えず、穏やかで有能な独身女性に変わっていた。編み物をして飼っているカナリアの話をすると、人々から秘密を打ち明けられるような女に。ヒルダはジムを見つめ返した。

「ミセス・フェアバンクスについてどんな噂を聞いているの、ジム？」

「そうだな、あのばあさんがいろいろと面倒を起こしているってことですかね。もう若くないですから。噂じゃ、おつむのほうが少々緩くなっているとか。幽霊に憑りつかれていると思っているそうですね。部屋に蝙蝠やら何やら、いろんなものが見えるらしい。おれに言わせりゃ、見たいものを見させておけばいいんですよ。もつとひどいものが見えるって人間もいるんですから」

ジムはきれいな曲がり方でフェアバンクス家の私道に車を入れ、家の横側の車寄せにこれ見よがしにきつちりと停車した。ヒルダはあたりを見た。屋敷は静かで、何ら問題もなさそうだった。赤い煉瓦の大きな家の横の廊下に明かりがとまり、照明がついている部屋が二階にも一つか二つ見えた。ジムはスーツケースをドアまで運び、下に置いた。

「さて、幸運を祈りますよ」彼は言った。「さっきの話は気にしないでください。ばかげた話ですからね」

「わたしはそう簡単に怯えたりしないわよ」ヒルダはにこりともせずと言った。

ジムに料金を払い、呼び鈴を押す前に車を見送ったが、タクシーがいなくなるとどういうわけか寂しい気がした。警視がこの件にヒルダを必要としているのだから、何か妙なことがあるのだろう。それに警視は幽霊の存在なんてまるつきり信じていない。暗がり立っただけで、ヒルダはほぼ二十年前、ミセス・フェアバンクスの娘のマリアンが結婚した日のことを思い出していた。当時、ヒルダ・アダムスは病院の見習い看護婦で、非番のときにこの家の前を通ったのだった。あのとき、この階段には赤い絨毯が敷き詰められ、鉄柵の外に群がった見物人は警官の制止を受けながら興奮して中を覗き込んでいた。ヒルダも足を止め、見物に加わった。

何台もの車が教会から戻ってくるのを新聞記者たちが待ち受けていた。到着した新郎新婦は階段のところまで立ち止まった。あれからかなり経ったけれど、今でもヒルダは当時の光景をありありと思いつけた。白いサテンのドレスとヴェールを身に着けたマリアンは長い裳裾を片手でたくし上げ、もう一方の手には白い蘭のブーケを持っていて、長身でハンサムな新郎はモーニング・コートの襟にクナシの花を挿し、笑顔で彼女を見下ろしていた。

外の舗道で見ていた小柄な見習い看護婦にとって、ロマンス小説が現実になったようなものだった。あの日、マリアンとフランク・ガリソンは若さと美に包まれていた。その結婚が離婚に終わったなんて。

ふいにヒルダは向きを変え、呼び鈴を鳴らした。

第二章

若い娘がドアを開けたのでヒルダは驚いた。執事か、少なくとも客間女中パウライメイドが現れると思っていたのだ。話し始めると、ヒルダに電話をくれた女性だとわかった。

「ミス・アダムスですか？」

ヒルダは相手に品定めされていることを意識した。安心させるように微笑んでみせた。「そうです」ヒルダは言った。

「わたしはジャニス・ガリソンです。いらしてただけてともうれしいわ」言いながらあたりを見回す。誰かに盗み聞きされていないかというように。「とても心配なんです」

ジャニスは横の廊下から中央の廊下までヒルダを案内し、そこでためらうように立ち止まった。低い声が聞こえてくる部屋は、あとでヒルダにもわかったのだが、図書室だった。なおもしばらくぐずぐずしていたが、ジャニスは廊下を横切ってドアを押し開け、かつては二つの客間だった部屋へ入っていた。今では二つの部屋がつながって一つの広い客間に変わっていた。黄色のプロケード織の家具がしつらえられたヴィクトリア朝の部屋で、クリスタルのシャンデリアが吊るされ、ほの暗い壁にはひどく趣味の悪い油絵が掛けてあった。ランプが一つしかともっていなかったが、ヒルダにはジャニスがはっきりと見えた。

きれいな顔立ちね、とヒルダは思った。たぶん十八歳くらいだろう。もつとも、この頃では年を言
い当てるのが難しいけれど。でも、まぎれもなく若いし、心配事を抱えているのは間違いない。ジャ
ニスはずばやい一瞥を廊下に投げると、両開きのドアを後ろ手に閉めた。

「あなたと二人だけで話さなければならぬです」ジャニスは息を切らし気味に言った。「祖母の
ことです。どうか——どうか祖母の頭がおかしいとか、そういうふうには考えないでください。奇妙
な振る舞いをしたとしても、それには理由があるのです」

ヒルダはこの娘が気の毒になった。ジャニスの目からは今にも涙がこぼれそうだった。けれども口調は
淡々としていた。

「わたしは妙な行動をとる老婦人に慣れていませんよ」ヒルダはにっこりして言った。「理由というの
は、どういうことですか？」

だが、ジャニスはヒルダの言葉を聞いていなかった。廊下の向こうの部屋のドアが開く音に耳を澄
ましていたのだ。ジャニスは言った。「少しお待ちいただけますか？」そして急いで廊下に出ていき、
ドアを閉めた。廊下からは低い声のやり取りが聞こえてくる。するとふたたびドアが開き、男が部屋
に入ってきた。大柄で疲れた顔をしている。耳の上あたりが白髪になった、豊かな黒い髪の男だった。
ヒルダは衝撃を受けた。フランク・ガリソンなのだろうが、ほぼ二十年前の新郎の姿とはまるきり様
変わりしていた。相変わらずハンサムには違いないが、年相応かそれ以上の年齢に見えた。にもかか
わらず、ヒルダの手を取ったときの微笑は魅力的だった。

「よく来てくれました」彼は言った。「娘から、あなたがいらつしやるとうかがいましてね。ガリソ
ンと申します。娘には少し休息が必要だと思いませんか、ミス・アダムス。このところ、娘は大変な

思いをしているのです」

「わたしはお役に立つためにうかがったんですよ」ヒルダは陽気な口調で言った。

「ありがとう。ずっと心配していたものでしてね。ジャニスには痩せすぎだ。あまりよく眠っていません。ジャニスの祖母が……」

フランクは言いかけて口をつぐんだ。片手を髪に滑らせた彼に目をやり、ただ老けただけではないとヒルダは見取った。疲労した様子だし、スーツは手入れが必要らしかった。ジャニスもそのことに気づいたかのように、父親の腕に腕を絡ませ、きつく握った。柔らかい感じの茶色の目で父親を見上げる。

「心配なさらなくて、お父さま。わたしなら大丈夫よ」

「今の状況が気に入らないのだよ、おまえ」

「おばあさまにお会いになる？」

フランクは腕時計を一瞥し、首を横に振った。

「わたしはアイリーンを連れて帰ったほうがいいだろう。彼女が来たがったからなのだが、しかし——おばあさまによりしく伝えておくれ、ジャニス。それと、今夜は少しでも眠るのだよ」

彼がドアを開けると、廊下にいる小柄な金髪の女がヒルダの目に入った。女は手袋をはめながら興味ありげにドアをじっと見ていた。かつては美しかっただろうと思われる女で、いくぶん不機嫌そうだった。ジャニスは当惑した様子だった。

「こちらはミス・アダムスです、アイリーン」ジャニスは言った。「おばあさまが落ち着きをなくしているの、看護婦さんに世話をしてもらったことにしたの」

アイリーンはヒルダにうなずいてみせると、ジャンニスのほうを向いた。「わたしの意見を言わせてもらうとね、ジャンニス」冷ややかな口ぶりだった。「おばあさまは施設に入っていただけのがいいと思うわ。蝙蝠やら何やらの騒ぎを考えるとね！ ばかげていまずもの」

ジャンニスは顔を赤らめたが、何も言わなかった。正面玄関のドアを開けたフランク・ガリソンの表情はこわばっていた。

「きみの考えは胸にしまっておいたほうがいいと思うよ、アイリーン」彼は言った。「さあ、帰ろう。おやすみ、ジャンニス」

ドアが閉まると、ヒルダはジャンニスを見やった。驚いたことに、目には涙が浮かんでいた。

「ごめんなさい」ジャンニスは言い、ハンカチを取り出そうと袖口の中を探し回った。「あんなふうに関が帰ってしまうことにどうしても慣れなくて。ご存じでしょうが、父母は離婚したのです。アイリーンは父の二度目の妻なんです」目を拭うと、ハンカチをしまい込む。「父は母が留守のときしか来られません。母は——両親が会うと、あまりいい雰囲気ではないのです」

「そうなのですか」ヒルダは慎重に言った。

「わたしは父が好きですけれど、離婚の際にどうしたいかと裁判所で尋ねられたとき、この家にいたいと答えました。祖母にはそのことがとてもつらかったのです。つまり、両親の離婚が。祖母は父を気に入っていました。それから」彼女はためらった。「それから父はあまりにも早くアイリーンと再婚したのです。それで、わたしは——だから、この家にとどまってよかったと思いました。こういうことをあなたに話したほうがいいと思っただけです」そしてつけ足した。「アイリーンはそんなにたびたび来ませんが、あなたに会ってしまったので——」

ジャンスは驚いた様子になり、それから当惑したようだった。「離婚後、母と祖母はあまり折り合いがよくありません。祖母は母を心からは許していないんです。なんだかわたしたちについて悪い印象を与えてしまったようですね」ジャンスは果敢に言葉を続けた。「実際、最近までは何もかもうまくいっていたんです。父はときどき来ましたし。もちろん、母が留守のときを見計らってですけれど。それに、行ける場合はわたしが父のところへ行きます。父の再婚相手はわたしの家庭教師だった人なので、当然、彼女を知っていました」

何か言いにくいことがあるのだなと、ヒルダはここで感じた。そして普段ならやらないようなことをやった。手を伸ばしてジャンスの肩を軽く叩いたのだ。

「そのことはもう忘れてください」彼女は言った。「わたしが来たわけですから、本を読むことは引き受けられます。実を言うと、読み聞かせの腕前はなかなかのものなんです。自慢できることの一つです。それに、午後のドライブも好きです。そんなに機会はありませんけれど」

ヒルダは微笑んだが、ジャンスは笑い返さなかった。若い顔は深刻で生真面目な表情を浮かべていた。またもや耳を澄ましているのだろうとヒルダは思った。屋敷内に何の音もしなかったので、ジャンスは安堵したようだった。

「ごめんなさい」ジャンスは言った。「わたしは本当に疲れているんだと思います。ここ一、二カ月、できるだけのことをして祖母を見守ってきました。あなたが祖母に会う前に、もう一度念を押しておきたいんですが、ミス・アダムス。つまり、祖母は気が触れてなどいないってことを。わたしと同じようにまともです。もし、そうではないと言う人がいても、どうか信じないでください」

二人が階段を上り始めたとき、廊下には相変わらず人の気配がなかった。ジャンスはスーツケース

を運ぶと言ひ張り、ヒルダは好奇心を込めて見回した。なんとなく失望を感じた。はるか昔の結婚式の日以来、この屋敷はヒルダにとって興味の対象だった。当時、彼女はここが花や音楽で満ち溢れ、人々にぎわっているだろうと想像していた。けれども、かつては華やかさがあつたとしても、今は完全に消え失せていたのだ。

だからといって、屋敷がみすばらしいわけでもなかった。左右にドアが並んだ中央の長い廊下には上質の絨毯が敷かれ、黒っぽい羽目板はワックスで磨いてあり、年代物ではあるが、家具は見事だった。しかし、広い居間と同様に廊下の照明は暗かった。若いジャニスのとを歩きながら、ヒルダはいつもこれほど暗いのだろうかと考えていた。ジャニス・ガリソンは若い身空で、こんな薄暗がりの中で暮らしているのだろうか。

二階が上がったところにある部屋のドアの前でジャニスは足を止めた。警告するような一瞥をさつとヒルダに投げてから、ドアをノックした。

「ジャニスです、おばあさま」彼女は明るい声で言った。「入ってもかまいませんか？」

部屋の中で誰かが動く気配がした。足音に続いて声が聞こえた。「おまえ、一人なの、ジャニス？」
「ブルック先生が勧めてくださった看護婦さんをお連れしました。きつと気に入るはずよ、おばあさま」

ごくゆっくりと鍵が外された。ドアがほんの数インチ開き、小柄な老婦人がこちらを覗いた。ヒルダは驚愕した。ミセス・フェアバンクスを、支配力のある女性として記憶していた。威厳があつて堂々としており、評議員の一員として病院を訪れた際には看護婦たちをひどくびくつかせたものだった。今やミセス・フェアバンクスは信じがたいほど縮んでしまったようだ。けれども、目は相変わらず

らず輝いていた。鋭い視線がヒルダに向けられる。それから、見たものに満足したかのようになり、ミス・フェアバンクスは鎖らしきものを外してドアを開けた。

「まだ手元にあるのよ」ミス・フェアバンクスは勝ち誇ったように言った。

「よかったわ。こちらはミス・アダムスです、おばあさま」

老婦人はうなずいた。握手はしなかった。「看護婦の世話を受けたくありませんよ」彼女はヒルダをしげしげと見ながら言った。「見張っていてもらいたいの。わたくしを脅そうとするのは誰か、そしてなぜなのかを知りたいのです。けれども、つきまとわれるのはごめんですよ。わたくしは病気ではないのですから」

「わかりました」ヒルダは言った。「面倒はおかけしません」

「問題は夜なんですよ」年老いた声がふいに哀れみを帯びた。「昼間はわたくしも問題ありません。昼はあなたも寝ていいです。ジャンスが部屋を用意していきましょう。でも、夜は誰かにそばにいてほしいの。廊下に行ってくれないかしら？ つまり、この部屋のドアの外に。隙間風があるなら、ジャンスに衝立でも立てさせます。あなたは眠ってはだめですよ、いい？ これまではジャンスがそうしてくれたのだけれど、この子は居眠りしてしまうんですよ。間違いありませんとも」

ジャンスはばつが悪そうだった。スーツケースを取り上げる。「お部屋にご案内します」彼女はヒルダに言った。「お着替えをなさりたいでしょう」

ジャンスがふたたび口をきいたのは、彼女たちが出てから老婦人の部屋のドアが閉められ、鍵が掛けられたあとだった。「わたしが言ったとおりでしょ？」廊下を歩き始めるとジャンスは言った。「祖母は完全に正気だし、何かが起こっているんです。それについては祖母が話してくれるでしょう。」

わたしには理解できないんです。無理よ。頭がおかしくなってしまうようなの」

「あなたは睡眠不足のせいで参りかけているんです」ヒルダは厳しい口調で言った。「大奥さまが『まだ手元にあるのよ』とおっしゃっているのは何なのですか？」

「祖母からじかに聞いたほうがいいと思います、ミス・アダムス。それでかまいませんか？」

ヒルダはかまわなかった。一人になると、事務的な動作で身の回りの支度にとりかかった。スーツケースの中身を開け、ぱりっとした制服をハンガーに吊るし、編み物袋や懐中電灯、注射器、体温計、さまざまなカルテをきちんと並べた。そのあと、手際よく着替えた。白い制服、白いゴム底靴、硬く糊付けされた白い制帽。けれども、しばらく手を止めて、相変わらずスーツケースの底にしまっていた三十八口径の自動拳銃をしげしげと眺めた。パットン警視から贈られたものだ。

「きみをどこかに派遣するときには、何か厄介事が起きているからなんだ」と彼は言ったのだった。「こいつの使い方を覚えるんだぞ、ヒルダ。こんなものを使う羽目にはならないかもしれない。だが、使う必要があるかもしれないからな」

そう、ヒルダは拳銃の使い方を覚えた。拳銃を分解して掃除し、また組み立てることさえできた。拳銃があるとわかっていただけで心強く思ったことが、これまで一度や二度はあったのだ。だが、今は拳銃を入れたまま、スーツケースに鍵を掛けた。今回の件がどんなものであれ——相当なものじゃないかと考えられたが——暴力沙汰にはなりそうにないと思ったのだ。もちろん、ヒルダの予想が間違っていたのだが、このときはきちんとした自分の姿を鏡に映してみたり窓の外を眺めたりしたあとで、間違いなく明るい気持ちになった。

ヒルダの部屋は隣のジャンスの部屋と同様に、横側の通りに面していた。二百フィートほど離れた

訳者あとがき

本書はメアリー・ロバーツ・ラインハート（一八七六—一九五八）の〈ミス・ピンカートン〉シリーズの第二長編『*Haunted Lady*』を全訳したものです。この作品は昭和三十七年（一九六二年）に『おびえる女』のタイトルで妹尾韶夫氏によって抄訳されています（『別冊宝石』一一二号収録）が、同氏の訳は参照させてもらう程度にとどめました。『おびえる女』では「フラー警部」となっていた主要登場人物の名を原文どおりに「パットン警視」にするなど原文表記を重視した結果、旧訳とは訳し方が異なる点があることをあらかじめお断りしておきます。また、現在では「看護師」という言い方が一般的である職業名を「看護婦」とするなど、本書では刊行当時の時代背景を考慮しました。

著者のラインハートは「*Had I But Known*（もし、わたしが知ってさえいたら）」（*H I B K*）派の元祖と呼ばれています。あの時にわたしが重大な事実を知ってさえいたら、大事な手掛かりを見逃していなかったら、その後の事件は起こらなかっただろうといった語りが特徴的です。国内ミステリでは、横溝正史の長編『犬神家の一族』が、このパターンの代表作でしょうか。

ラインハートの代表作は一九〇八年に発表された『螺旋階段』（『*The Circular Staircase*』初訳は延原謙、早川書房・刊）ですが、ほかにも多くの作品を残しています。ピッツバーグ看護婦養成所で看護婦としての訓練を受け、のちには医師と結婚したという経験を生かしたと思われる、看護婦のヒル

ダ・アダムスを主人公にした、この『憑りつかれた老婦人』もそのひとつです。本作について簡単にお話ししましょう。

個人宅で病人の世話をするという表の顔とは別に、警察の手伝いをして犯罪を解決する、裏の顔を持つヒルダ・アダムス。病人の看護を口実に潜入した家庭の秘密を探り出し、優れた観察力や推理力を駆使して犯人を突き止めるヒルダの能力に感心し、パットン警視は彼女を「ミス・ピンカートン」というあだ名で呼んでいました。そんなヒルダが今回、潜り込むことを依頼されたのは裕福な未亡人、イライザ・フェアバンクスの屋敷でした。かつては社交界の花だったフェアバンクス夫人ですが、年老いた今はおかしな言動も見られるらしく、自分の部屋に蝙蝠や鼠が現れると言っています。まわりの者は老婦人の勘違いだと思っていました。孫娘のジャニスは祖母を案じていました。相談を受けたパットン警視の頼みにより、ヒルダは老婦人の世話をするという名目でフェアバンクス家で住み込みの看護婦を務めることとなります。

けれども、蝙蝠や鼠は単なる老婦人の妄想ではありませんでした。閉め切つてあるのに、フェアバンクス夫人の部屋には確かに蝙蝠などが現れたのです。さらに、フェアバンクス夫人が以前に砒素で毒殺されたこともわかります。

老婦人の家族構成は複雑なもので、長男のカールトンは商売に失敗し、農場を買って農業をやりがつていますが、母親が金を出してくれないことを不満に思っているようです。その妻のスージーとフェアバンクス夫人の折り合いはよくありません。長女のリアンは離婚のショックが癒えず、自暴自棄な暮らしを送っています。母親とも衝突している様子です。リアンの夫だったフランクは、娘のジャニスの家庭教師だったアイリーンと再婚していました。フェアバンクス夫人は義理の息子のフ

〔著者〕

M・R・ラインハート

本名メアリー・ロバーツ・ラインハート。アメリカ、ペンシルベニア州ピッツバーグ生まれ。迫りくる恐怖を読者に予感させるサスペンスの技法には定評があり、〈HIBK（もしも知ってさえいたら〉）派の創始者とも称された。晩年まで創作意欲は衰えず、The Swimming Pool（52）はベストセラーとなり、短編集 The Frightened Wife（53）でアメリカ探偵作家クラブ特別賞を受賞。代表作の『螺旋階段』（08）は『バット』（31）のタイトルで戯曲化されている。

〔訳者〕

金井真弓（かない・まゆみ）

翻訳家、大学非常勤講師。千葉大学大学院人文社会科学研究所修士課程修了。大妻女子大学大学院人間文化研究科博士課程満期退学。おもな訳書に『クリミナル・タウン』（早川書房）、『マリア・シラボワ自伝』（文藝春秋）などがある。

と
憑りつかれた^{ろうふじん}老婦人

——論創海外ミステリ 248

2020年2月20日 初版第1刷印刷

2020年2月29日 初版第1刷発行

著者 M・R・ラインハート

訳者 金井真弓

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1899-3
落丁・乱丁本はお取り替えいたします